

・雨でも休まず、266回、267回・

「小原本陣の森・若柳嵐山の森」

- ・定例活動 : 8月 2日 (第一日曜日) : 小原本陣の森・団地化を目指す、弁当持参
*ベテラン向き、担い手育成、技術向上、参加費400円、
- ・定例活動 : 8月16日 (第三日曜日) : 若柳嵐山の森・里山交流、多様な森林活動
*一般むき、参加費400円、主食・自分の食器、飲料水。

-
- *注意1 : スズメ蜂の活発な時期。黒っぽい衣類厳禁、長袖着用。熱中症注意・水を取る事。
 - * 2 : 初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合、ベテランは各自森へ
 - ・服 装 : 汚れても良い服装、着替え・滑らない足元
 - ・持 参 : 成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水
 - * 3 : 危険管理・救急体制 : 森林ボランティア保険他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

非営利 NPO 事業

NPO=Non Profit Organization : 特定非営利活動団体 : 行政や企業の手の届かない公の、特定の分野の問題解決のために非営利活動をしている団体。

非営利とは、事業をして利益を出しても分配が出来ないという意味であるが、利益を出す事業をしてはいけないと解釈している人が大方である。NPO活動はまだまだ、理解されていない。

昔から“講とか隣組とか隣番”などの互助組織が奉仕の精神で公の手の回らない所を埋め合わせていたが、戦後、社会のシステムが大きく変化して、このようなものは殆ど姿を消した。特に、米国の持ち込んだ自由競争経済原理の個人主義思想は、良くも悪くも各方面に影響を及ぼしている。

当会は森林に特定した volunteer(自発的に申し出る、進んで事に当たる)NPO 団体だ。月2回の定例活動日を設けて活動しているが、時には100人を超す参加者があり、雨でも休まずと12年間、継続して来たから、社会的にそれなりの影響力を持つに至っている、活動費は、会費・入会金・活動参加費・特定請負事業・支援金・助成金補助金・寄付金で成り立っており、21年度の総予算は23,800千円である。

森林整備は本来、国土保全・治山治水、国が責任を負う事業であるが、その森林が荒廃の一途にあり、それ故、大きな危機感を持って森林の荒廃を止めるべく私たちは活動している。活動を継続するためには活動資金が必要で、支援金や助成金の提供を受けている。これは本当にありがたく助かるのであるが、どうしても納めできないのが、外部に教を乞う謝礼金や本部人件費を認めない支援団体があることだ。認めない理由は、個人の考えで自発的に取り組む事がらであるから”タダ”で働けと言うのだ。自分を犠牲にして公共のために働く奇人な人に対して無礼というものではなかろうか。決して、お金が欲しいと言っているわけでもないのに。

小原本陣の森・定例活動 7月5日（第一日曜日）

Forest Nova☆ 麻布大学1年 矢野芽衣

7月に入り暑さが増して、本格的な夏に近づいてきました。今日は緑のダムの方は小原の基地の片付けなど、Forest Nova は上で経路作りの続きを行いました。今回 Forest Nova は私自身を含め小原の活動が初めてのメンバーが多かったため、最初に小原の森についての説明をしていただき、それから作業を開始しました。



午前中は人数を半分に分けて、経路作りと今期一回目のチルホール講習会を行いました。チルホール講習会では、チルホールの使い方を学びつつ経路作りの材にする木を一本伐採しました。経路作りのほうは、途中で材が足りなくなってしまうために、新しく木が伐採されるのを待って午後から本格的に作業を再開しました。

午後も引き続き2グループに分かれ、経路作りの続きと以前作った経路の手直しを行いました。木の根が多く杭を打ち込むのに苦戦して時間がかかってしまいましたが、途中手直しをしていたグループと交代して作業を行い、だいたい7～8段ほど増やすことが出来ました。

午後に新潟大学の方々が見学に来るとのことだったので、2時くらいに活動を切り上げました。その後は新潟大学の方々と軽い交流会をし、意見を聞くことができました。

森林についての話を沢山聞くことができ、勉強になりました。これからはどんどん暑さが増してくるので、十分な水分補給をして熱中症に気をつけてください。

.....

学生連合 FOrEstNova はベテランに育った4年生が4名、一挙に卒業して後を継ぐ3年生が少なかったが、活動の核となっている麻布大学の2年生が頑張っていて新入1年生と他大学の参加が増えて陣要としては、一回り大きくなった印象が強い。

会長は女子、神宮理沙さんが引き継いだ、そのおとなしげな雰囲気の中に、どうしてそんな強靱な神経があるのかと驚かされる。また、副の役割を担う斎藤駿一学生の明朗・闊達な性格がぴたりとそれを支えて活動を調和させている。

今月号の新・一年生の投稿者、矢野芽衣学生の文章の中にも、活動に堂々として取り組む姿勢が見えて頼もしい。

新潟大その意見交換は、地方と都市の学生の森林に対する切り口に大きな相違を感じたが、将来、Foresterを目指す学生が何人もいた事が大きな希望となった（石村記）

5日は「小原本陣の森・定例活動日だが、新潟大学林学科の申し入れは“FSCの森見学”が希望で石村が引き受ける事となった。大学を早朝7時に出発し12時30分、JR相模湖駅で待ち合わせる事とした。

雨の予報が外れて曇天。蒸し暑い日。引率教員合わせて大学バスで23名参加。大学からの要望は、緑のダムが ①森林に取り組んだ理由 ②FSCの森現場視察 ③ 今後目指す方向。

- ① 取り組んだ理由は、いろんな場面で紹介してきたから、この紙面では省略
- ② 基地～緑のダム体験学校ルート～望星の森～学生連合の森～水源～東海自然遊歩道分岐を經由して下山～巨木の森をシャニムニと藪を掻き登り～鈴木家本家の庭でオジイサンにごあいさつ～基地。
*経路の要所・要所でその場の持つ意味、FSCのガイドラインが求めていることなど問題の解説・説明。
*巨木の森では、猛毒：赤マムシと、危険：黄色スズメ蜂に遭遇。そろりとやり過ごして無事。
- ③ 集合広場で ①の説明補充と目指す方向については・・・
 - 1 森林NPOが相模原市と「新しい森林経営の実験：林地団地化・集約施業の取組み」
 - 2 毎日新聞社と協働する「森林NPOの自立モデルづくり」

新潟大に対しては「若柳の森」で一通りの役目をやや早めに終え、「小原の森」で働く“学生連合 Forest Nova”と意見交換会を開くこととして、バスで「小原の郷・広場」に移動。学生連合も早めに作業を切りあげて、3時30分に小原の郷広場に到着。地方の大学と都市連合の大学の意見交換会は有意義であった。

- ① 新潟1：「林学に関係のない法学部などの都市学生が“どうして森林活動をするの？”
都市1：「環境破壊の問題は、林学部学生だけ任せる状況ではないでしょ」
- ② 都市2：「卒業後の進路はどうするの？」
新潟2：「林業行政に入れば幸運だけだね」
- ③ 都市3：「縦割り行政の中で大学で学んだ事が活かされるかどうかは疑問だよ」
都市4：「欧州では林学をマスターした人は、Forester と言って弁護士以上の社会的地位にあって収入も多いそうだよ。そんな道を探ってみたら？」
新潟3：「Foresterになる途がないじゃないか」
都市5：「だから、そんな途を自分たちで切り開こうじゃないか」

Foresterの途を開くと手を挙げた学生は2名。ノバの斎藤学生と新潟大・学生。ならば、石村は「では、おれも相模原 Forester Academyの開校に向けて国・県・市・企業に働きかけるぞ。3年位掛かるだろうなあ」



新潟大生と意見の交換をする

「“小原本陣の森” 活動の位置付けを教えて・・・学生連合 Forest Nova 」

「 NPO 緑のダムに取って”小原本陣の森
“活動は、どんな位置付けにあるにかを教え
てください」と言ってきた。定例活動終了後、
川田会員が以下のように答えた。8 月末には、
期末試験が終わるので、この説明を下に今後
の活動について話し合う事になった。
このような質問をしてくる学生たちにその成
長を感じる。



小原本陣の森の活動（川田会員の説明内容）

- ① 「森林破壊という負の遺産を残してはならない」という 基本理念に基づいて、F S C ガイドラインの指
導、「森をつくる、森とつなぐ、森をいかす」を実践してきたが、その実績を認めた「神奈川県、緑の基金、
相模原市」などが資金などの支援をしてくれている。
理念実現には、林業再生として環境と経済が両立しなければ、ならない。
 - ② 小原本陣の森の活動
 - 1 定例活動（協力協約による森林整備）：枝打ち、間伐、下草刈り、経路づくり、土留工事
 - 2 行政と森林整備を希望する山林地主の仲介及び整備を希望する山主の掘り起こし。
 - 3 地元、山林整備事業者の育成、地元林業の再興
 - ③ 小原宿活性化推進会議（相模原市）への参加
相模原市と旧四町合併により、小原地区が開発重点地となり、当会はそのメンバーをして分科会に参加。
*地域の活性化は当会の定款 4（森林の町の活性化を図る）に掲げている：地域の活性化なしに林業の再
興はない。
*参加 P J：甲州古道復活 P J，小原本陣の森整備 P J，小原の郷整備 P J，街並保存 P J
 - ④ これらの実績により相模原市と「林地団地化・協力協約・協働事業」を締結、3ヶ年契約
*協力協約の目的・成果
小林地を集約団地化する事によって、効率的な作業道を敷設し作業の機械化、コストダウンを図ること
で林業再興のモデル地区をつくる。
 - ④ 毎日新聞社（水と緑の地球環境本部）は、国土緑化推進機構の協力を得て、緑のダム北相模を支援する事
となった。
- 利用間伐：相模湖総合事務所内の表示板サンプル納入
大量の捨て間伐木は、パルプや建材に応用できる。望製紙会社と商談を開始している。

*森林の保全・再生は、森林整備だけでは完結出来ない。地域との交流と活性化、森林資源の利用による経済性の創出を図ることが健全な持続的森林経営の途である。当会の小原本陣の森活動も多様な活動によって前進できる。

暑い活動・暑い夏、緑溢れる森、この暑いのに52名に参加。

お花畑班

多分、雑草に埋もれているだろうと思っていた“お花畑”は、山主さんのご厚意で雑草がきれいに刈り取られていた。
今日の作業は楽だろうなあ・・・と思ったが、あにはからんやお花の下に隠れていた雑草抜きには、大いに手こずって、ヤッパリ忙しいお花畑班であった。向日葵は、これから咲くが、楽しみ。



木工班

“小原の郷”に持って行った間伐材製の椅子や花台が観光客に「売って下さい」と言われたそうで、ご機嫌ヨロシ。また、小原の町の人々とも交流を深めることが出来たと嬉しげである。

木工班に弟子入りした加藤学生は、自分の才能？ に目覚めたのか、緑のダム北鎌倉代表・兼松まゆみさんに頼んでこの夏、鎌倉の宮大工の研修を受ける事になったとか。そんな弟子の報告に、森の師匠たち・大坪、松尾会員は嬉しそう。

森林整備班

初参加の3人に川田隊長が午前中は経路の刈込みを指導、午後は毎日新聞社・山本記者に取材のために石村会員と交代。石村会員のご指導は枝打ち・間伐。狙い外れた間伐では、掛り木になってロープを掛けてエンヤコラと綱引きになったとか。

望星の森（望星高校）

植えて6年目の「栃の木」の下の生態系調査。ご指導は、桜井教授（日大）と弟子の田中院生。
午前中は、調査エリア作り。午後は、植物に被度（占めている割合）高さなどを記録する。

*生態系調査：1平米内の植物や昆虫の数調べ。

コクサギ被度3%、60cm。ツユクサ被度4%、16cm。ノブキ被度6%、25cm。五葉アケビ被度2%、23cmなどなど。

クモやミミズ、いろいろな昆虫類の出現に、キャーキャーw a i w a i、熱血・宮村教諭との貴重な体験授業・・・「疲れたけれど楽しかった」

桂北小：ムササビ探見隊：夕方5時集合



日没の30分ほど前に活動を始める夜行性動物“ムササビ探見隊”は、子供32人、父兄14人が「若柳嵐山の森“に集まった。巨木の森の目星をつけておいた“ムササビの巣”からは、遂に姿を見せてはくれなかったが、暗くなった森の中でも沢山の動物がいる事が分かった大発見隊でした。
“ムササビ”は見えなかったが、佐々木さんが沢山のホルタルを持って来てくれて、夜の森に放してくれた。

ピカー ピカーと光る蛍は美しかった。

若柳嵐山の森において、Forest Nova が今後、森林整備の設計・管理など一通りの施業ができるようになるための実地訓練という位置付けで、緑のダム北相模よりその活動地域の一部管理を任せていただきました。

この B 地区を整備していくにあたって、生き物が多様な森を目指して整備をしていこうと目標を定めています。

昨年には B 地区に 10m×10m の調査区を設け植生調査を行い、その調査枠内の間伐作業を行いました。現在は間伐した材を活用するための材降ろしや、材を降ろすための経路づくりを行っています。降ろした材は 6 月 20、21 日に行われた NHK のイベントで工作に使用したり、他のイベントで木の時計を作ったりして、「木を使うことは森を守ること」を発信するのに一役かっています。

今後は間伐の前後での植物の変化を調べるために 2 回目の植生調査を行う予定です。



生き物の多い森にして、より多くの人に森に足を運んでもらい、森林の重要性や森林整備の必要性を伝えていきたいと思っています。

ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、日頃の努力を怠らず真剣に取り組んでいきますので今後ともよろしくお願い致します。

Save The Future

Forest Nova 麻布大学 2 年 神宮理沙

6 月 20、21 日に、NHK で行われた「Save The Future」という環境イベントに出展しました。私たちは「木を使うことは森を守ること」を発信するために、ワークショップとして B 地点で冬に間伐した材を使ったドアプレート作成を行いました。参加者にはまず日本の森の話の紙芝居を見てもらい、間伐材について理解を深めてから工作に取り掛かってもらいました。

また、それに関連して、環境活動を行っている大学生の団体の特集した番組「Save The Future@キャンパス エコスペシャル」が 21 日に生放送され、Forest Nova も生出演しました。6 月 7 日の小原定例活動日に、B 地点での活動が 1 日かけて取材され、番組中で紹介されました。取材中は一人一人のメンバーと話をしていた、とても丁寧に取材していただいたと思います。森での実際の活動を映像で発信できた貴重な機会だったと思います。

4 年生卒業後を継いだ、2 年生学生たちの、この成長ぶりはどうだ！。堂々と自分たちの行動目標を見定め、NHK/TV で、その活動を全国に広報している。しかも、森の現場まで取材に来させる活動の魅力には、唾然とさせられる。来月から、佐々木指導員が抜けると言うが、ここまで育てた佐々木会員の力量も大したものだと思う（石村記）。

6月12日(金) うす曇り 9:30-15:00 定例作業

参加者は岩澤理事長以下5名、うち当会から水上、佐藤。

通常通りの下刈り作業、梅は順調に生育している。今回の成果は、バックヤード地区でわらびを発見したこと。もともとは沢山あったのだろうと予想される。来年の収穫を期待して、念入りに草刈をする。この日は午後から、進和学園の万田窯を見学させてもらった。陶器だけでなく、竹炭の窯も見せてもらって興味深かった。ここの裏山の竹林はきれいに整備されていて、心が洗われるような気がした。

6月13日(土) うす曇り 9:30-16:00

この日は特別イベント、この春梅の苗を頂いた、内野さんのご実家の梅もぎ作業にお礼奉公に。参加者は6名、当会からは児玉、山本、佐藤の3名、内野さんも現地参加。国府津駅で待ち合わせて、2台の車に分乗、下曽我の現場に向かいます。本日もぐ梅は十郎という梅干用の梅。皆で一本の木に挑戦、想像以上の鈴なりにびっくり、両手をフルに使って、びくのような枝にぶら下げた容器に梅をもいでゆきます。最初の一本に皆で取り組んだのに1時間もかかってしまいました。昼食をはさんで、黙々と仕事を進めます。この梅の豊かさ、これぞ大地の恵みだと実感しました。15時には全員疲労困憊、お土産の梅を一袋ずつ頂いて下山しました。さー帰って梅酒をつくろー！！



6月14日(日) 曇り 14:00-18:00

公益信託ひらつか市民活動ファンドというのを知り、ダメモトでもいいやと先月応募しました。この日はその公開審査会でした。岩澤理事長以下3名で臨みます。応募は10件、合格は5件の予定、結構狭き門です。ましてや初参加のわれら湘南の森、どうなることやら？結果、なんと28万円獲得決定という思いもよらない成果を上げ、祝杯をあげました。がぜんやる気が出てきます！！

6月27日(土) 晴れ 9:30-15:00 定例作業

この日は12名が集まりました。岩澤さんは所用のため朝礼のみ。ボランティアの若い女性が2名。当会からの参加者は、児玉、小林、佐藤の3名。いつも通り、梅の苗を中心に下刈りを実施、バックヤードが一番日当たりが良く、ここを果樹園として集約したらという意見が出された。そろそろ、今後の全体計画をまとめてゆく時期に来ているようだ。まずは平塚市に頼んで、道具類を収納する物置用地の確保に全力をあげることに。
(佐藤(憲)記)

.....

* 通常は、第一回目の申請は却下するならわしになっていると聞いている。活動の継続性が重視されるからだそうだが、その意味で「緑のダム湘南の森」は足掛け4年間、代表の岩澤さんが“雨でも休まず・・・”と一人の日でも継続してきた。初申請でも、受け付けられたのは、そんな熱意と確かな実績があったからだと後日、某審査員から聞かされた。(石村記)

NPO緑のダム：相模原市との関係：(相模原市と協働して森林政策を策定する)

一昨年の「相模原市・さくら祭」で市役所横の大駐車場を借り切っただけ以来、「森林広報：相模原ネイチャーフェスティバル」を恒例化している。幸い、1・2・3回と、会を重ねる毎に内容も良くなり、入場者も第3回目は、6千人を越す勢いになっている。毎回、加山市長をはじめ市の幹部の方々も視察に来られて、森林広報の内容を評価して下さっている。

当会は、神奈川県内で最大の森林NPOになっていることなどもあって、「相模原環境基本計画策定」の委員なども務めている。

71万人口を抱える相模原市は来年、「特定政令都市」になるが、旧津久井四町（藤野・相模湖・津久井・城山）を合併したことによって市域が一举に3.6倍、森林率が58%にもなった。

そこで市として森林政策を作らなければならないのだが、「これまで旧4町は、県主導で林野行政が展開されたため森林ノウハウがない」と困惑している。そこで県・旧町の基礎データを集めて整理すると同時に、当会等森林知識のある団体・個人を集めて政策をつくる事となった。

このような状況にあって、今年4月から国土緑化推進機構の後援を得て、毎日新聞社（水と緑の地球環境本部）が当会の活動を支援する事となった。第一弾活動は、6月21日の相模原市後援による「緑のダム体験学校」、第二弾は、8月8日・9日の「林業先進地・FSC国際認証林・速水林業視察」。この視察の目的は相模原市にはこれまで森林が皆無であっただけに「新しい森林ビジョンを策定しよう、林業復興に独自色を出そう」と言う大胆な試みでもある。

視察を企画したのは、「NPO緑のダム北相模、毎日新聞社」であるが参加は、国土緑推、神奈川県、相模原市、毎日新聞社、緑のダム、ネットワークの人々総勢21名の参加。

こんな大胆な事が出来るのが、非営利活動の特徴ではなかろうか。そして、ここで学んだものをどのように生かすかが、試される重要な視察行になる。（この視察行の結果は、来月号で報告する）

毎日新聞

6月30日付

「林業復興に独自策」

詳しくは同日付けの
新聞記事をご覧ください

当会の事例：森林環境活動を、どのように経済化しているか

当会の活動の課題は「森林破壊と言う負の遺産を子孫に残してはならない」であり、その具体的な活動は、FSCのガイドラインに沿って、環境の保全・再生が経済活動に繋がる事である。究極の目的は、地域社会が豊かで平和な暮らしができるようにすることだ。では、12年間の成果を辿ってみる。

1998年に発足して3年間は、地域にどうしたら受け入れられるかに忙殺された。法人登録した02年度

は、信頼に裏づけられ共感を得られるため何をすれば良いかに心を砕いた。5年にFSC国際認証を取得したことで、社会的な信用が付いた様に思う。この間、炭焼き小屋や養蜂等を試みた。

兼松会員が考えた木の太枝を使った「兼松人形」が一時、バカ売れに売れたが一過性で止まり、会の運動資金には、至らなかった。

FSC認証取得の翌年、巨木の森の森林整備と同時に、原木市場、末端売り先を探した。結果、杉1立米を6万円で売り、それを製材して神奈川建具組合に立米10万円で売却した。60万円程の利益が出たが、継続的な木材の販売には繋がっていない。

07年に(財)オイスカの勧めでFSC材による積木の生産販売をするようになって、09年7月まで9万個つくり51,500個3,090千円の売り上げを上げている。



* ちなみに、2003年～2009年における当会の森林特定事業

	年間事業額	特定事業額	特定事業率	備考
2003年	3,738	0	0	・・・
2004年	9,104	1,427	15.7	協力協約A・B地区
2005年	11,784	3,987	33.8	原木材の製品化、継続できず
2006年	14,189	1,530	10.8	協力協約C・D地区
2007年	14,124	2,052	14.5	積木発売開始
2008年	13,645	2,163	15.8	積木が軌道に乗り出し始めた
2009年	23,796	8,250	34.6	森林整備請負、積木販売

積み木は、本格的に売り出してはいないが、イベントで出すたびに何らかの問い合わせが来ているので、次の港区エコプラザでの出品では、ハッキリ売る意思表示をする。これらの取組は、ボランティア活動程度の活動に過ぎない。

前出の相模原市との取り組みでは、本格的な森林(環境)と森林(経済)の調和・共生を図り地域社会の産業創造を考えている。例えば、地域材住宅促進、古紙と杉間伐材による混合パルプ、木質バイオマスエネルギー他、様々な森林資源の開発とマーケットの創出である。森林は未開拓の無限の宝庫だ。また、相模原市は、巨大な森林資源の生産地(山梨・長野・新潟)と消費地(神奈川・東京)を全面に抱え可能性大である。



事務局注：左の写真の木の時計はFSC材ではありません

都市から森林政策を発信する・・・港区エコプラザ

21日～26日、港区浜松町にある「港区エコプラザ」に“緑のダム・FSC材積木”を2万個、出品した。2万個は、サスガ、迫力のあるボリュームだ。

ここは、港区が森林問題を都市部から森林部に呼びかける趣旨に賛同して、毎日新聞社とアースデイ社が、協同出資して毎日アースデイ社を設立し、港区の管理者委託制度の適用を受けて受託管理している。港区の窓口は、地球環境部という大層な名の部署であるが、環境問題は、一般市民こそが主人公になって考え、行動せねばならぬ時代に入ったと言うことだ。当会での「一人の専門家より99人の一般普通の人々の参加」を標榜しているが、同じ考え方と言える。

港区は既に、あきる野市に20haの森林整備受託林を借り受け「区民の森」として森林の保全・再生に取り組んでいる。更に紋別市・小諸市・ユス原町など6市町村と森林・木材利用契約を結び、都市部から森林部へ、森林の保全・再生を働きかけている。JR浜松町駅側の「港区エコプラザ」は、この運動の発信・受信基地である。



港区エコプラザ外観



積木に熱中する由紀ちゃん

活動のモットー : 急がず、楽しく、無理せず、休まず、ボチボチと・・・
そして、沢山の参加で森は良くなる。

名 称 : NPO 法人緑のダム北相模

事 務 局 : 154-0023 東京都世田谷区若林3-35-9

発行人 : NPO 緑のダム北相模・運営委員会 : 03-3411-1636

H P : <http://midorinodam.jp>

E-mail : info@midorinodam.jp

協働団体 : 神奈川県（政策部土地水資源対策課、環境農政部森林課、県央地域県政総合センター） セブンイレブンみどりの基金、相模原市（市民協働推進課）
毎日新聞社（水と緑地球環境本部）

ご支援の団体 : WWF・japan, イオン財団、市民社会チャレンジ基金、神奈川県建具協同組合、生命の森宣言・東京、東海大付属・望星高校、JFEメカニカル